

〔日本書紀^{二十五}〕大化二年三月甲申詔曰^略○中復有百姓溺死於河逢者乃謂之曰何故於我使遇溺人因留溺者友伴強使祓除由是兄雖溺死於河其弟不救者衆^略○中如是等類愚俗所染今悉除斷勿使復爲

〔保元物語^三〕北方身投給事

爲義入道ノ妻^略○中サラバ舟岡ヘトテ桂河ヲ上リニ北山ヲ差テ行程ニ五條ガスヘノ程ニ岸高

ク水深ゲナル所ニテ輿ヲ立サセ石ニテ塔ヲクミ入道ヨリ始四人ノ君達ノ爲ト廻向シテ懷袂

ニ石ヲ入^略○中岸ヨリ下ヘ身ヲ投テ終無墓成給フ乳母ノ女房是ヲ見テ連テ河ヘゾ入ニケル

〔平家物語^八〕太宰府落の事

平家小舟共に取乘てよもすがら豊前の國やなぎがうらへぞわたられける^略○中神無月のころ

ほひ小松殿の三なん左中將清經は何事もふかう思ひ入給へる人にておはしけるが、ある月の

夜ふなばたに立出てやうでう音鳥らうゑいしてあそばれけるが、都をば源氏のためにせめお

とされちんせいをばこれよしがためにおひ出されあみにかゝれる魚のごとし、いづちへゆか

ばのがるべきかは存へはつべき身にもあらずとてしづかに經よみ念佛して海にぞしづみ給

ひける

〔源平盛衰記^{四十}〕中將入道入水事

三位入道三ノ山ノ參詣事ユヘナク被遂ケレバ濱宮ノ王子ノ御前ヨリ一葉ノ舟ニ棹サシテ萬

里ノ波ニゾ浮給フ遙カノ沖ニ小島アリ金島トゾ申ケル彼島ニ上リテ松ノ木ヲ削ツ、自名籍

ヲ書キ給ヒケリ平家嫡々正統小松内大臣重盛公之子息權亮三位中將維盛入道讚岐屋島戰場

ヲ出テ三所權現之順禮ヲ遂那智ノ浦ニテ入水シ畢

元暦元年三月二十八日生年二十七ト書給ヒ與ニ一首ヲ被遺ケリ